

【特別展 鏡像の美—鏡に刻まれた仏の世界—によせて】

## 高麗時代の鏡像と仏画にみる水月観音圖像の系統 (韓国・国立中央博物館所蔵品から)

今回の特別展では韓国・国立中央博物館所蔵の高麗時代の鏡像のうち6面を出陳させていただけることとなりました。日本では初出陳となるため、ここに紹介致します。韓国の鏡像は現在確認されるものは約20面あり、中国の作例数とはほぼ同じですが、日本と比べると大変に少数です。製作年代は全て高麗時代(918-1392)と見られるものの、出土地の知られるものは極わずかです。附随する情報は乏しいといえます。

線刻された圖像をみると、観音像は12面と多く、さらに、水辺で半跏あるいは輪王座の姿勢をとる水月観音像は6面と半数を占めます。水月観音は中国唐時代に考案されたと思われる図様で、敦煌の石窟壁画及び石窟から発見された絵画に五代以降の作例が認められます。この図像は西夏の領域でも製作され、朝鮮半島においては高麗時代の着彩仏画140余点のうち約4分の1を占める代表的な画題の一つです。『唐朝名画録』によると唐時代末には周昉の絵画を新羅の人が持ち帰ったとする記述があり、彼の代表的な画題でもある水月観音を描いた画が伝わった可能性は充分考えられています。また、大覚国師義天(1055-1101年)著『大覚国師文集』巻18の記述「和國原公讚新画成水月観音」から、11世紀末には「水月観音」の名称が朝鮮半島で用いられていたことがわかっ

ています。さらに、京都・清凉寺の水月観音が刻まれた鏡像は入宋僧裔然が台州にて北宋・雍熙二年(985)に発願、造像し、請求した木造釈迦如来立像の胎内物であり、北宋・治平四年(1067)に建造の子長鐘山石窟(陝西省延安市)には万仏洞の壇の上方左右に一對の水月観音の彫像が認められる他、木彫像においても数多くの水月観音の系統とみられる半跏の像があります。このように、北宋時代には水月観音と見られる半跏の観音像が非常に流行していた様子がうかがえます。中国の鏡像については『美のたより』no.155に浙江省台州の作例を紹介しましたが、北宋の初め(五代末の呉越国王銭弘俶が建立の雷峰塔から太平興国二年:977年頃に製作の作例が発見されています。銭氏は978年に宋に降るため、実際は現在知られる最も早い中国の鏡像は呉越国にて制作されたといえます)から作例が認められます。これらの事象及び、銭弘俶は高麗へ仏典を求め、高麗から僧侶諸観が遣わされている(『釈門正統』巻20・義寂伝など)等、交流も多く認められることから「鏡像」は北宋時代に浙江省周辺から高麗へと伝わったと推測されます。

高麗では水月観音と楊柳観音の区別はされていなかったようであり、その他、海難に対して信仰された瀧水観音も

同義に用いられ、同様の図像であらわされたようです(郭東錫「高麗 鏡像の図像的考察」『美術資料』第44号1989年12月 国立中央博物館)。そのため、鏡像にあらわされた図像においても、水や楊柳とともにあらわされた半跏または輪王座の観音を水月観音系統の図像として一括して扱い、考察します。高麗の鏡像のうち最も初期と考えられるのが湖州鏡の鏡面に図像が刻まれた水月観音鏡像(図1)です。水とも雲ともとれる波線の上方で人円光の中に観音は坐しており、浮遊するかのようです。観音は正面を向き、上半身がやや硬い印象を受けますが、小さい頭部と細長く伸ばされた体部と脚部がバランス良く、伸びやかな線で刻まれています。本鏡は湖州鏡であり、中国浙江省湖州で宋時代に製作され、舶載されたと見られます。鏡胎に線刻が施されるものは現在のところこの1面のみです。本品の観音像のように、正面を向き、片足を立て膝にして腕をのせ、片手は脇で触地する輪王坐像は瀧水観音鏡像(『美のたより』no.151の拙稿に掲載)の他3面に見られ(このうち1図はやや斜め向き)、鏡像にあらわされた水月観音図の主流といえます。水月観音図ではこの図様以外は図2の斜めを向き、両手で片膝を抱える姿勢が1面認められます。本図は画面下方に『法華経』「普門品」の諸難図があらわされます。このような諸難図は観音の功徳を示し、瀧水観音鏡像にも描かれています。

このような鏡像における水月観音図の特徴を仏画に描かれた水月観音と比較しますと、まず、これまでも幾度か

指摘されているように、長谷寺本(図3)と図2の鏡像はあらわされた観音の図像が酷似します。両作品はそれぞれ仏画と鏡像の中で主たる存在とはいえませんが、大変興味深い問題を孕んでいます。しかし、ここでは鏡像図像の性格を明確にするために、主な傾向を追います。高麗時代の水月観音図で製作年代の明確な作例は鏡神社本(至大三年:1310銘)と泉屋博古館本(図4、至治三年:1323銘)です。そして、高麗仏画の中でも特に水月観音の作例についてしばしば指摘されるように、図像には明らかに定型が認められます。つまり、斜め向きの観音が岩座に半跏坐をし、画面下方に善財童子が描かれる構図が圧倒的に多く見られます。観音は片足を垂下し、片足を屈曲してのせ、腕を足の上のせており、視線は善財童子へ向けます。その姿勢はふくよかで、透けるヴェールを頭上から被っています。善財童子が描かれる仏画は『華嚴経』「入法界品」の内容が主たる内容であることは明らかで、鏡像に認められるの図像とは異なります。定型化の認められる仏画に用いられた図像は鏡像には今までのところ1点も見られません。正面向きの輪王坐像も斜め向きの半跏像ともに敦煌壁画に描かれた水月観音図の系統に認められる図像であり、仏画と鏡像の制作目的や使用方法に応じて異なる系統の図像が選択されたと考えられます。(図4は菊竹淳一・鄭于澤編『高麗時代の仏画』時空社2004年4月より転載させていただきました。瀧朝子)

図1



図2



図3



図4

